

ジークフリートとして 生きる

鉄血

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公がジークフリートになり彼女達を救う物語だ。

目次

設定	1	および封印	65
転生と彼女との出会い	6	四糸乃パペット	
原作が始まる一ヶ月前の事	16	四糸乃と出会った日	77
ジークフリートの夢	23	ライダー	88
十香デッドエンド			
四月十日	28		
彼にとっての最悪の結果	35		
二回目の出会い	40		
問い	44		
51 街の散策および好敵手との出会い。			

設定

真名

ジークフリート

身長190 cm

体重80 kg

ステータス

筋力 耐久 敏捷 魔力 幸運 宝具

B+ A B C E A+

保有スキル

対魔力―

宝具『悪竜の血鎧』得た代償によって失われている。

騎乗B

騎乗の才能。大抵の乗り物なら人並み以上に乗りこなせるが、魔獣、聖獣ランクの獣は乗りこなせない。

黄金率Cー

人生において金銭がどれ程ついてまわるかの宿命。

ニーベルングの財宝によって金銭には困らぬ人生が約束されているが、幸運がランクダウンしている。

仕切り直しA

戦闘からの離脱、または状況をリセットするスキル。

技の上限を初期値に戻し、バットステータスのいくつかを強制解除する。

竜殺しA+

竜種を仕留めたものに備わる特殊スキル。

竜種に対する攻撃力、防御力の大幅上昇。

これは天から授かった才能ではなく、竜を殺した逸話がスキル化したといえる。

宝具

幻想大剣 天魔失墜（バルムンク）

ランクA+

種別 対軍宝具

レンジ1〜50

最大捕捉500人

魔劍の属性をもつ劍。

柄に込められた青い宝玉は真エーテルが貯蔵されており、真名以て発動される際に使用する。

なお、連射が可能。

悪竜の血鎧（アーマーオブファヴニール）

ランクB+

種別 対人宝具

レンジー

防御対象一人

悪竜の血を浴びることで得た常時発動型の宝具。Bランク以下の物理攻撃と魔術を完全に無効化し、更にAランク以上の攻撃でもその威力を大幅に減少させ、Bランク分の防御数値を差し引いたダメージとして計上する。また正当な英雄による宝具の攻撃の場合はB+相当の防御数値を得る。

その防御力は赤のランサーの槍撃を受けても微傷程度で済む頑強さを誇る。

但し、伝承の通り背中にある、葉の様な形の跡が残っている部分のみその効力は発揮

せず、その個所を隠すことも出来ない。背中に防具を纏っていないのもそれが理由である。

プロフィール

元々彼はただ少しアニメが好きで一般人であった。

だが、神に憑依経験させられた事により、自我が殆どなくなり、殆どジークフリートになっている。

始めは誰かの為にならなければならないと思っていた。聖杯大戦で自分の本当の夢が、自分が正義だと考えられる正義の味方になるという考えにたどり着かせたライダーには感謝している。

ただ、デート・ア・ライブは主人公自身、殆ど読んでいない為に十香が精霊だということ以外知らない。

なお、頼み事があると大抵何でも引き受けてしまう為に、お人好しとも言われることも？

また、原作のジークフリートよりは謝らないが、それでもタイミングがかなり悪い時に遭遇したり、空気が読めないのでよくすまないと言っている。

夜刀神十香

ジークフリートのマスターにして精霊。

本来は五河士道の一番ヒロインの筈がジークフリートのマスターになった。

かなりの大食らいでジークフリートも驚く程である。

まだまだ先だがジークフリートが大好きで、構って欲しいがジークフリートは学校に行けないので普段は大人しい。

ジークフリートいわく、食費さえどうにかなれば大丈夫だそう。

転生と彼女との出会い

俺はある日に死んだ。

昔からの幼馴染みが海で溺れていたから助けに行つてソイツを助けた後、自分が溺れて死ぬなんてどんなマヌケだよと思つたぐらゐに馬鹿な事をした。

そしてその後、神と名乗る男が現れた。

何でも、人を助けたという理由で転生というものをさせてくれるらしい。

俺としてはどっちでもよかった。

ただ、人々を助けられたら何でもいいと思つた。

だが、そんな神は俺を転生させた。

魔剣バルムンクで、邪竜ファブニールを打ち倒し、背中以外不死身の肉体を手に入れ、そして最後には弱点である背中を貫かれて死んだジークフリートに。

◇◇◇

オレの夢は一体何だったのだろう。

前世の記憶はもう殆ど覚えていないが、此処が fate 世界だったというのは覚えて
いる。

邪竜ファブニールを打ち倒した後、オレはあのジークフリートのように成り果てた。人々の願いを叶える願望器に。

”正義の味方になりたかった”という夢が今のオレの体の本来の持ち主の夢だった。オレはその夢を叶えようとした。

彼様には出来ないだろうが、それでも人々の願いを叶える事が出来るのなら……と。そしてオレは背中を友人に貫かれて死んだ。

こうなる運命は避けられないのは分かっていた事だが、それでも国の為に死ねと言われたならオレはそれを受け入れるしかない。

この後に聖杯戦争に呼ばれるだろう。その時に自分の夢は一体なんだったのか答えが出ると考えて。

◇◇◇

あの後、オレは聖杯大戦に呼ばれた。

マスターにオレの叶えたい事は何かと言われたが、オレは無いと答えた。そして聖杯大戦でオレは戦った。

始めはカルナと。

成る程コレは英雄だ。彼ほど最強の名に相応しい英雄はいないだろうと実感できる程に彼は強かった。

また、彼との再戦するときには此方が本気でも勝てるのは不可能に近いだろう。だが、それでもオレはマスターに必ず勝つと言ったからには勝たなければならぬ。

また再戦の日まで。

そしてある夜にホムンクルスと一緒にライダーが逃げたので追うことになった。

マスターからはライダーを生かしておけと言う命令から

ライダーは殺せない。

だが、彼はどうだ？ホムンクルスである彼を見逃すか否か。オレ自身の意思であれば見逃してあげたいと思うが、マスターの命ならばやるしかない。

その時、ライダーがオレに言った。

”君が本当にしたいことは何だ!!”と。

そう言われてオレは気が付いた。前世のオレは確か人を助けて死んだ。ならオレも人を助けなければならぬ。

コレは本心であり、オレ自身が出来る事でもあるのだから。

そしてオレは死にかけのホムンクルスに自分の心臓を渡した。自分勝手だとは思いますが、それでもオレは彼を救いたい。それだけは間違いない本心だ。

最後に自分の夢に気づかせてくれた、ライダーに”ありがとう”と感謝し、オレは聖杯大戦から脱落した。

そして座に帰ると思った矢先にオレはオレを転生させた神にまたであった。



「お前はジークフリートとして生き何かを得たか？」

神はオレを見ながらそう言った。

そしてオレは言った。

「ああ、オレは前世では持ち得なかったものをジークフリートとして生き、オレは持てるようになった」

「それは一体なんだ？」

神はそう答えると、オレはすぐに言い返した。

「オレは、悲しんでいる人々を助けたい。オレ自身の力では出来ることはそう多くはないが、それでも多くの人々の願いを叶え、幸せでいられるのであればオレはそれを叶えられるサーヴァントでありたい。それがオレの願いだ」

神はオレの願いを聞くとゆっくりと眼を開けてオレを見た。

そして・・・

「なら、お前にはある世界に行つて貰う。召喚という形にはなるが、自分が言った事を忘れずその夢を叶えるがいい」

「ありがとう。貴方には感謝の言葉しかない」

「よせ、そういうのは慣れていない。ほらさつきと行け。お前を呼んでいる者がいるぞ」
「では、オレは此処で行くとしよう。私を転生させてくれた神よ。感謝する」

そう言つてオレは光の中に歩いて行つた。

一人そこにたたずんでいた神はジークフリートとして転生した、一人の青年をみながら聞こえない声で言つた。

「息子には何もしてやれなかつたからな・・・これくらいはしてやらなければな・・・」



そしてオレは召喚された。周りには何もない空間だけであつた。

「此処は・・・一体？」

「誰だ」

後ろから可憐な、しかし疲れているような声が聞こえた。

オレはその言葉を聞き、すぐに体を前に向けた。

いかんせん、背中が弱点であるオレにとっては後ろに立たれるのはかなり不利になるからだ。

「動くな」

そう言われてオレは動きを止めた。

そうしなければオレの首は彼女の持つ幅広の大剣で跳ばされる事になっていただろう。

「もう一度聞く。誰だ」

その少女を見た瞬間オレは彼女が一体誰なのか分かった。

というか、世界観が違う。

彼女の名は・・・

夜刀神十香

いわば前世で軽くしか見ていないデート・ア・ライブのヒロインである。

◇◇◇

変な男が来た。

私が思ったのはその一言だ。

背中に剣を背負い、胸の辺りがピカピカ光っている髪の毛の長い変な男だ。

私はその男に少し興味がでた。

あのメカメカ団とはまた違う不思議な奴だからだ。

なぜ、ここにいいのか知りたい。それを聞くため私はその男に話かけた。

◇◇◇

さて、どうしたものか・・・

オレはそう思いながら彼女を見た。

今の彼女を見て思った事は彼女はまだ主人公に会っていない事だ。

なぜ、分かるかというそれは彼女の出すオーラだ。

疲れた表情で諦めたような顔を見てもまだ彼に会ってないとすぐに分かる。

そんな彼女にどうしたらいいのかオレは分からない。

すると彼女の方から話かけてきた。

「貴様は一体誰だ？何処から来た」

彼女から話かけるのは珍しいと思いつつ、オレは答えた。

「オレは、ジークフリート。呼び辛いのであればジークでいい。あなたのサーヴァントだ。何処から来たと言われてもオレはあなたに召喚されただけだ」

そう彼女はオレのマスターだ。

彼女から魔力が繋がっているのが確認してある。

そして何より彼女の左手にオレの令呪があるからだ。

「サーヴァント？それは一体なんだ？」

彼女が不思議そうにオレを見てくる。

そしてオレは彼女にサーヴァントはどういった者か簡単に説明した。

「サーヴァントと言うのは一種の使い魔と思ってくれればいい。簡単に言うともスターを守る幽霊みたいな物だ」

すると彼女はオレを見て言った。

「ますたーとは一体なんだ？ 私の事なのか？」

「ああ、マスターの左手にあるアザがマスターである証だ。これを令呪と言う」

「れいじゆ？」

彼女はそう言つて左手を見た。

「ああ、いわばマスターがオレに使える絶対命令権と思つてくれたらいい。三回まで使えるが、最後の一回を使つてしまうとオレが消滅してしまうことになる。なので二回までしか使えないと思つてくれたらいい」

オレが説明し終わると彼女はオレを見た。

そしてこう言った。

「ならば、貴様は私の敵ではないのだな？」

「ああ、マスターの敵ではないと言えるだろう」

「本当に敵ではないのだな？」

「ああ、ならこの剣に誓つてもいい」

「本当に本当に敵ではないのだな？」

「ああ、オレはマスターの味方だ。嘘をついたりはしない」

「……誰がそんな言葉に騙されるかばーかばーか」

「……騙しているつもりはないのだが？」

「だが、まあ私を殺さないのであれば私と一緒にいてもいいぞ」

「大丈夫だ。マスターにそんな事はしない。オレはマスターを守るサーヴァントだから安心するといい」

すると彼女は気がに入らないのか、オレに言った。

「マスターと呼ばれるのは何かムズムズする。私に名前をつけろ」

まさかの名前をつけろとききたか。

そうなるオレは五河士道の役割を奪ってしまう事になる。だが、それで良いのだろうか？

だが、不機嫌そうに此処をみる彼女に名前をつけないと逆に信用されないだろう。なら主人公には悪いが此処で名前をつけさせて貰おう。

「マスターの名前は夜刀神十香でいいだろうか？ いかんせんオレは名前をつけた事が殆どなくてな、すまない気に入らないのであれば考え直そう」

「ふん、まあ構わん。それでトーカーとはどう書くのだ？」

オレはその答えに地面に十香と書いた。

「ほう……これでいいのか？」

オレが書いた隣に十香と下手くそな字がそこに書いてあった。

「ああ、それでいい」

「そうか」

しばらく自分の書いた字とオレの書いた字を見つめてうなずいた。

「ジークフリート」

「どうしたマスター？」

「十香だ」

「？」

オレはマスターである十香の言葉が分からなかったので首を傾げた。

「十香。私の名だ。素敵だろう？」

成る程、名前を呼んで欲しかったのかとオレは思いながら言った。

「ああ、マスター……いや十香。ああ素敵な名前だ」

それがジークフリートになったオレと彼女の初めての出会いだ。

原作が始まる一ヶ月前の事

オレと十香の関係はあの後にサーヴァントとマスターという関係を通り過ぎた。

オレ自身はあまり何もしていない。ただ、マスターである十香が必要以上に話しかけたり行動で示してくるのだ。

恐らく、ずっと一人だと寂しかったのだろう。

その時にオレというサーヴァントが来たものだからきつと枷が外れて今の状態になったのではとオレは思う。

あその後にはオレはマスターと共に様々な場所へ飛ばされた。

だが、飛ばされた場所には誰もおらず十香が言うメカメカ団という、武装集団に襲われるぐらいだった。

だが、彼らと戦っている時にオレはかなり不味いと確信している所がある。

それは、オレが空を飛べないという事だ。

マスターやメカメカ団は空を飛べるがオレは空を飛ぶことが出来ない。

そうなるとオレは彼らから一方的に攻撃を受ける事になる。それだと逆にマスターに負担をかけることになるため、オレは自分の弱点を相手に教える事になるがある方法

を取った。

それは、宝具の連射である。

オレの宝具、バルムンクは少量の魔力で高出力のビーム？を連射することが出来る。

この剣がなければオレはファヴニールには勝つことが出来なかつただろう。

故に今の状況が・・・

「幻想大剣 天魔失墜!!」

宝具を撃つたびに彼らは地に落ちていく。

「幻想大剣 天魔失墜!!」

落ちた彼らをもう一度宝具で吹き飛ばし戦闘不能にさせる。

「幻想大剣 天魔失墜!!」

銃弾やミサイル等が飛んで来るがそれを宝具で薙ぎ払い消し飛ばす。

対軍宝具を連発したおかげで周りの被害が酷い事になっている。

後で直すであろう彼等には本当にすまないと思っているがこうでもしなければマスタ―を守る事や彼等に攻撃を当てる事が中々出来ないので許して欲しい。

なお、この光景を見たマスタ―が目をキラキラさせていたがどうしたのだろうか？

おかげで彼らのオレの呼び名がドラゴンスレイヤーになったとだけ言っておこう。

◇◇◇

〈プリンセス〉の隣に変わった男が現れた。

〈プリンセス〉よりかなり大きい身長に細身の大剣。そして何より胸から腹にかけての模様が光っているのだ。

新しい精霊かと思ったが、反応は精霊のそれではない。

だが、それでも精霊と一緒にいるのなら敵で間違いないのだろう。そして私たちは彼に攻撃を仕掛けた。

始めは全く攻撃もせずただただ撃たれるだけであつたがかすり傷すらつかない。

なら、と思つた矢先に彼の持つ剣から青いビーム？みたいな物がでて私たちを飲み込んだ。

私は後に語る。

彼はあの時、バルムンクと言っていた。

なら彼はあの有名な竜殺しなのだろう。

ジークフリート

英雄にして邪竜を殺した怪物。

それが彼なのだろうか？

それは私には分からない。

◇◇◇

粗方終わった後、オレは此処が何処なのか確認した。

ビルがあり、商店街や住宅地などがあるかぎり、かなり大きな街だろう。とわいつても誰もいないが。

オレとしては懐かしいと言つてももう殆ど覚えてはいない。

行き先はマスターに任せよう。何処へ行くのか分からないがオレはそれに付き従うだけだ。

オレはそう考え、マスターである十香に話かけた。

「マスター、時間があるので少し散策でもしないか？」

すると十香は不機嫌そうな顔で此方を見た。

「十香だ」

成る程。オレがマスターと呼んだから不機嫌なのか。

オレは十香が不機嫌そうな顔を見て瞬時に理解した。

「すまない。十香」

オレは十香に謝るとすぐに機嫌が良くなったのか笑顔で言った。

「なんだ？ジーク」

「いや、少しこの街を散策でもしないかと思つてな」

オレが再度言うると十香ははしやぎながら言った。

「遊びに行くのだな!!」

「ああ、そんな所だ・・・」

ただの何処なのか確認するはずが面倒な事になってしまった。

自分の言葉が足りなかつたせいで彼女に誤解をさせてしまった。

かといって今の十香にそんな事を言えば確実に落ち込んでしまう。それだけは避けたい。

では行くぞー!!と言いながら十香は行ってしまった。

オレは手のかかるマスターだと思いながら、彼女の後を追った。

◇◇◇

予想外にも程がある。

〈プリンセス〉の監視をしていたラタトスクにいる五河琴里は、歯を食い縛りながら苦い顔をしていた。

プリンセスと一緒にいるあの男は一体なんなのか。

精霊かと思つたが、精霊ではない。だからといってただの人間かと思えば間違いなくN〇と言える。

それは何故か。まずこの男には精霊にあるはずの霊力がない。あの剣から出たあのビームは間違いなく霊力とは違う物だ。

人間でもないというのは間違いなくその身体能力と頑丈さ。

人間が音速に近いスピードで走れるといわんばかりにあの男は移動してみせた。

そして何より、あの頑丈さ。

精霊用ライフルやミサイルを受けても無傷でいられるその堅さ。素肌にサーベルで攻撃しても逆にサーベルが刃こぼれするその異様さ。

間違いなく人間でもない。

しかも極めつけは、精霊であるあのプリンセスと一緒ににはたから見てもデートにしか見えないその行動をしているという事。

自分の兄が本来しなければならぬ事をこの男はやっている事に対して琴里は……。

「とんでもない強敵が現れたわね……」

予定を早めるべきかしらと考えるのであった。

◇◇◇

そしてジークフリートは目の前の学校を見て、少し目を閉じた。

来禅高校

主人公である五河士道がいる学校ではなかったか？と思ったがハッキリと思い出す事が出来ない。

「どうした、ジーク？」

「いや、何でもない」

「そうか」

いや何でもあるのだが自分の中で此処だったかと若干混乱している状態だ。

まあマスターと五河士道が会うのは後一ヶ月後、それまでにマスターとの関係を始める時のように戻さねばとジークフリートは考えるのであった。

ジークフリートの夢

夢を見ている。

コレは私の夢ではない。

だって、ジークフリートがそこにいるのだから。

◇◇◇

「ここは、どこだ?」

私は見知らぬ街を見て言った。

いつも私が出る場所とは違う。

石畳の道に石造りの建物、そしてジークと一緒に呼んだ“えほん”とかいう本にかかれていた、城がそこにあつた。

「ジーク? 何処だ? 何処にいる?」

彼がいない。

それだけで私は不安でいっぱいになっていく。

すると前の人だから、彼を呼ぶ声をした。

『ジークフリート様、山に住み着いた盗賊を退治して下さい』

『ああ、任せておけ』

彼が周りにいる人達の願いを叶えていく。

私はそれだけで胸が苦しくなった。

何故だか分からない。

だが、それがヒトの生き方ではない。それはただ願いを叶えるだけの……。

そこまで思った時、まるでシーンがカットされたかのように変わった。

そこにいたのは何時ものようにジークフリートに群がる人だかりと返り血を浴びて

血だらけになり歩いていくジークフリートの姿があった。

するとまた、その人だかりから願いを求める人達の声が聞こえてきた。

『ジークフリート様、恋人を殺したあの憎き男を罰して下さい!!』

『ジークフリート様』『ジークフリート様』

私はその言葉を聞くだけで耳を塞ぎたくなる。

やめろ

彼は人々の求める願いをただただ叶えていく。

やめてくれ

ただ機械的に求められたら何度でも

見たくない

そして彼の言葉が聞こえた。

『願いに悪も善もない。オレは彼らの願いを叶える願望器。ただ、それだけでいい』
その言葉を聞いた瞬間、私は目から熱い十二カがあふれでた。
否定しなかった。

彼は一人だった私を助けてくれた人だったから。

私みたいな嫌われ者の元に来てくれた人だから。

だから・・・そんな事を言わないでくれ。

また景色が変わった。今度は建物の中らしい。

そしてそこにはジークフリートと一人の男がいた。

その男がジークフリートに向けて口を開いた。

『ジークフリート。この国はお前の死を望んでいる』

『ああ、オレの死によつてこの戦いが止まる事を祈ろう』

私はその言葉を聞いて、全身が固まった。

死ぬ？ジークが？こんな事の為に？

そしてまた風景が変わった。

今度は森の中だ。

すぐそばに泉がある。

そしてその前でうつ伏せになって倒れているのは……

「ジーク？」

バルムンクを背中に刺されて生き絶えているジークフリートの姿があった。

自分の相棒であるジークフリートが死んでいる。

それを見て私は。

「あ、ああ、あああ」

ただ見ているしかなかった。

そしてジークフリートの声はまだ聞こえた。

『そういえば、オレの願いは……オレが求めていたのは何だったのだろうか？』

私の意識はそこで途切れた。

「マスター!!大丈夫かマスター!!」

私が目を覚ますとそこにはジークがいた。

「良かった。ずいぶんうなされていたのな。一体何かと心配し、マスターどうかし

たか？」

私はジークの心配を無視して彼の胸に顔を埋めた。

「ジークの夢を見ていた」

「生前のオレの夢か？」

「ああ・・・」

「見てもつまらない人生だろう」

「・・・あんな生き方で良かったのか・・・？」

「オレにはあんな生き方しか出来なかった。それだけだ」

泣きじやくる私を慰めながら彼はそう言った。

「もう離れないからな。何があつても離さないから」

だからジークも離れないでくれ

全く、困ったマスターだ。

オレはサーヴァント。彼女は精霊。

彼女の魔力がなくなればオレは現界できなくなるといふのに。

ならば今いられる時間を大切にすべきだと起きたらマスターに伝えておこう。

オレはそう決心した。

十香デッドエンド

四月十日

オレのマスターには困ったものだ。

まさかオレの生前を夢でみる事になるとは。

予定が狂うにも程がある。

これでは彼が彼女の精霊の力を封印する事が出来なくなる。

それではマスターが外の世界がどれ程美しい物かが分からないまま、精霊として生き

ていく事になるだろう。

それだけは避けなければならない。

マスターには精霊としてではなく、一人の人間として生きて欲しい。

それが今のオレの願いだ。

願い叶え続ける事しか出来なかったオレが願いを持つとは、かなり珍しい。

さて、マスターが彼と出会うまで後数日。

その時までオレはマスターを守るとしよう。

◇◇◇

士道は走っていた。

自分の脚が千切れんばかりに。

妹である、琴里がファミレスの前から動いていなかったのを携帯で確認した時に俺はすぐに学校から飛び出した。

空間震の発生前であつてか、街には誰もいない。

車が通らない道路にも、街路にも、コンビニにも誰一人として残っていない。

ついでさきほどまで、誰かがそこにいたと思わせる生活感を残したまま、人間だけが街から消えている。

まるでゲームや映画のワンシーンみたいだった。

最近は空間震も頻繁にあつたせいかわ、避難は迅速だった。

だというのに。

「アイツはなんで残つてやがんだよ……！」

士道は叫びながら走り続ける。

先程からアイコンはファミレスの前から動いていない。

危険だとかは思考の外に捨てて、妹のもとへ、と次の瞬間だった。

突然自分の前が光で包まれた。

そして次に鼓膜が破裂しそうな爆音と衝撃が士道を襲った。

その衝撃で士道は後方に転んだが目の前の光景を見て絶句した。

「なっ!!」

それも無理はない。何故なら目の前の街の風景がすり鉢状に削りとられていたのだから。

そして削り取られたクレーターの中心。

そこに巨大なナニカがそびえたっていた。

まるで玉座のような。

そしてその玉座の前に不思議なドレスを纏った少女が一人、そこに立っていた。

「なんであんな所に」

砂ぼこりでもあまり見えないが、長い黒髪と紫色に輝くスカートだけは見て取る事は出来た。

女の子であることは間違いないだろう。

すると、少女は何かを探るように首を回し、士道の方へ顔を向けた。

そして、玉座の後ろにある剣の柄の様なものを握るとソレを引き抜いた。

それは、幅広の巨大な大剣だった。

幻想的な輝きを放つ、巨大な剣。

少女がその剣を振りかぶると、その軌跡をぼんやりとした輝きが描かれていった。

「な．．．っ!!」

少女が、土道の方に向かって、剣を横薙ぎに振りはなつた。間に合わない。と思ひ土道は目を閉じたその時。

ガンツ!!

金属同士を思いつきりぶつけ合つたような音が響きわたつた。衝撃が土道にはしる。だが、それだけだつた。

土道は恐る恐る目を開けるとそこには一人の男が背中を向け、剣を上振り上げた状態でそこにたつていた。

「何が起こつて．．．」

俺は訳が分からずその男をみた。

そしてその男はこちらを振り向いた。

そして．．．

「大丈夫だつたか?」

俺に向けてそんな言葉を言つた。

その男は長いくすんだ髪に腹筋から顎近くに掛けて水色に輝く模様があつた。

そしていかにも騎士と思わしき鎧。

右手には少女が持つ剣より細くそれでいて大きい。

背中が素肌がむき出しになっていて、真ん中には葉っぱの痕のような形のアザがあった。

その男を見て俺はこう思った。

英雄と。

◇◇◇

危ない所だった。

マスターが彼に剣を振り上げた瞬間をみたオレはすぐに剣を抜き、右上へとそらさなければ彼は死んでいただろう。

彼は何が起こったのか分からないまま、呆然としている。

まあ、無理もない。

自分が少女に殺されそうになったのだから。

マスターがオレを不機嫌そうな顔で見ている。

何故そのような顔でオレを見るのだろうか？

オレは全く分からなかった。

「何故、私の邪魔をした。ジーク」

マスターが言った。

その問いにオレは言い返した。

「何も状況が分からない彼に何故、剣を振るつた。マスター」

「ソイツも私を殺しに来たのだろう。なら」

オレはその言葉を聞き、始めて彼女に怒りを覚えた。

「マスター!!それは違うだろう!!彼はいつも戦っている彼らではない!!ソレを何故分からない!!」

オレが怒つたのを見て、彼女は困惑した。

「ジーク?何で怒るのだ?私は、ただ・・・」

「マスター。オレは君のサーヴァントだ。だが、その気になればこちらの方から契約を切ることになる。この無意味な攻撃を続けるのであればオレはマスターから契約を切らせてもらう。そして彼に契約をすることになるがそれでもいいか?」

オレがそう言った瞬間、十香は方を震わせて俯いた。

そして呪詛のように呟き始めた。

「私との契約をきる?・・・嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ・・・謝る。謝るからきらないでくれ。頼む・・・お願いだ。ジークウ!!」

焦点のあつていない目でマスターは此方を見る。

そしてオレは言った。

「オレではなく、彼に謝ったらどうだ？ マスター」

そう言った瞬間。爆発が起きた。

「くっ!! 彼らか!! マスター!! 倒すぞ!!」

どうせ、彼らだろう。とオレは思い剣を構えた。

しかし、マスターが剣を構えない。どうしたのかとオレは見た。

「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい」

成る程これはダメだ。

そう判断し、今回はマスターを運び逃げ出した。

後にオレは思う。

一足遅かったと。

彼にとつての最悪の結果

流石に今回はやり過ぎた。

オレは先程からマスターの事を考えていた。

無防備な彼に、問答無用で攻撃したマスターに向けてかなり強く言ってしまった。

説明不足のオレも悪かった。

おかげでマスターは隣界に戻った今もなお、謝り続けてる。

だが、オレは一方的な暴力は嫌いだ。例え、マスターの命令であってもオレはその命令は聞かないだろう。

今回、マスターがやったのはソレだ。

それだけはオレの中でも許す事は出来ない。

今回は感情に任せて言ってしまったが、もっと冷静に言えた筈だろう。

だが、すぎてしまったものは仕方がない。

マスターには謝らなければ。

そしてもう、こんな事をしないように言わなければならぬ。

だが、今回の件はオレも悪い。

オレが出来る範囲で彼女の願いを叶えよう。

それが今後の物語を大きく左右することになることを知らずに。

◇◇◇

ジークに嫌われた。

私はその事で頭がいっぱいだった。

何故、ダメだったのだろう。

ジークは私のダメな所はダメだと言ってくれる。

私は言われた通りにしただけなのに。

ジークがあんなに怒るのは始めてだ。

普段は怒る事がない彼があんなに怒るとなると、私はとんでもないことをしたのではないかと思う。

「ッ!?!」

唐突にジークのあの言葉が思い浮かぶ。

『私との契約をきる』

やだ。やだやだやだやだやだやだ!!ソレだけは。ソレだけは絶対に嫌だ!!

そんな事をされるぐらいならいつそ死んだ方が・・・。

そう考えたとき、後ろからジークの声が聞こえた。

「十香」

私は顔を上げて彼を見た。

涙で視界がぼやけてジークの表情がよく見えない。

そして彼が近づいて来て・・・

私を抱き締めた。

「――」

私は声も出なかった。

何で？ 私は悪い事をした筈だ。なのにどうして私を抱き締める？

そしてジークが私に言った。

「すまない。今回はオレも言い過ぎた。十香に伝え忘れた事もある。オレの出来る範囲でマスターの願いを叶えよう」

ジークは謝りながらそう言った。

そしたら、私も自然と涙があふれでた。

「私も悪かった・・・もうしない。もうしないから嫌いにならないでくれ・・・。お願いだ。私を要らない子にしないで・・・」

私も謝り続けた。

ジークの為なら私は何だってする。言う事だつて聞く。だから・・・だから・・・私

を要らない子にしないで。

◇◇◇

マスターがそんな事を思っているとは思っても見なかった。

まさか、そこまでオレに嫌われたくなかったのか。

だが、それだと不味い。

オレが彼女の好感度を上げても意味がない。

その仕事は彼がしなければならぬのだから。

だが、それももう遅かった。

彼女はもう、一種の依存症だ。

この状態だと自分の言う事しか聞かなくなるだろう。

マスターとサーヴァントの関係が逆転するとは思わなかった。

これではオレがマスターで彼女がサーヴァントという形になってしまふ。

そうなるのと彼が彼女の精霊の力を封印することがほぼ不可能になる。

本来、オレがやる事を彼女がする。

無いとは思いますがもし、この世界に聖杯があつたとしたら。

彼女は間違いなくオレに使うだろう。

だが、聖杯戦争が無いとは言いきれない。

何故なら、オレというサーヴァントが召喚されているから。

聖杯があるのなら、オレは願う。

彼女を元に戻してくれ・・・と。

二回目の出会い

あれから数日がたった。

最近マスターの様子がおかしい。

いや、おかしくなったのはオレのせいだが、違う意味でマスターが変わった。

それは、雰囲気が変わっていた。

普段、オレがいる時は変わらないが、いないときに彼女を見てみるとまるで剣を突き付けられるような雰囲気になっていた。

心なしか目付きも鋭くなったような気がする。

オレがいる時は普通の少女のような顔をして、オレがいない時は赤のセイバーのような……そんな感じだ。

そして何より、彼女の戦闘スタイルが赤のセイバーに似てきたという事だ。

剣を投げ、蹴り飛ばし、殴り付けなど赤のセイバーにかなり似てきた。

今の彼女は勝つ為なら何だって良いというような感じだ。

これには頭を抱えた。

仮にも彼女はプリンセスと言われ容姿も美しい精霊。

そんな彼女がヤクザばりの蹴りを相手にするのを見て唾然するしかない。オレが止めろと言わない限り、彼女は気がすむまで相手に蹴りや殴り付けなどをし続けるだろう。

最近は自分がしたい事を言わなくなりオレの言う事ばかり聞くようになった。

それはそれで問題だ。

それはつまり、マスターはオレ以外の人達を信用していないと言う事がある。

これでは彼女の力を封印することは不可能だ。

学校で土道と出会うまで、あと少し。

それまでには今よりマシにしておかなければ。

◇◇◇

半壊した校舎に土道は精霊を探していた。

始めは琴里の言う事は信じきれなかったが今はもう信じるしかない。

彼女を助けなければ空間震が収まる事はない。

そして何より・・・あの男と一度話して見たいのである。

何故、自分を守ったのか。彼女と一緒にいるのか。

そして、彼は琴里が言っていたあの英雄なのか。

ソレを聞くために彼はここにいる。

そして土道は自分の教室にたどり着いた。

中から話声が聞こえる。

きっとあの二人の声だろう。

彼は意を決して扉を開けた。

「

頭の用意していた言葉が一切合切吹き飛んだ。

教室の真ん中。

彼と彼女はそこにいた。

楽しそうに笑いながら彼に話しかけている少女。

そして苦笑いしながら彼女の話を聞いている英雄。

まるで何処かのワンシーンを見ているようだった。

そして少女が自分の存在に気づき――。

一瞬にして少女の雰囲気が変わった。

先程まで、笑顔を振り撒いていた少女が一瞬にして目付きが敵を見る目に変わった。

「――ッ!!?」

その殺気に俺は声も出さず固まった。

彼女は俺を完全に敵として見ている。

そしてその目が語っている。

”私の邪魔をするな”——と。

すると隣にいる彼が言った。

「さて、マスター。彼はオレ達によろがあるようだ。その殺気を閉まってくれ」

落ち着いた声で彼は言った。

するとその少女は少し不満ながらも殺気をしまい、彼の手を取り、睨み付けるようにして俺を見た。

「気にしないでくれ。彼女は少しだけ不機嫌なだけだ。

オレがいる限り大丈夫だから安心してくれ」

明らかに怪しいが、彼女は俺を睨み付けるだけで何もしてこない。

この人がいるおかげだろう。

そして彼が俺に質問をしてきた。

「唐突にすまないが、君は一体何をしにオレ達の元へ来たのかソレを聞かせて貰えないだろうか？」

彼の言葉にオレは言った。

「俺は五河士道。彼女を救う為に来ました。”竜殺しの英雄ジークフリートさん”」

問い

士道がジークフリートの真名を言った瞬間、彼女がとてつもない殺気を振り撒き出した。

彼女の瞳孔は竜のように細く鋭くなり、彼女は手に塵殺公を持ち士道の首にその刃を突き付けた。

その時、ジークフリートが彼女に言った。

「止めろ。マスター」

彼の言葉に彼女はその腕を止めた。

彼女がこの場で俺を殺すのは容易い。

だが、彼女が俺を殺さないのを見る限りジークフリートが言った命令が効いているようだ。

故に、今の彼女は自分の憤怒の感情とジークフリートの命令の優先順位が、彼の命令の方が上にあるようだ。

彼女は歯を食い縛りながら、ゆっくりと剣を降ろした。

「いい子だマスター。少しだけ彼と話がしたい。少しだけ部屋の外で見張りをして待つ

ていてくれ」

「……………ツ!!!……………わかった……………」

彼の言葉に彼女は一瞬目を見開いたが、すぐに彼の命令に従った。

そう言つて彼女は教室の外へ出ていった。

そうして取り残されたのは俺とジークフリートの二人のみ。

そしてジークフリートは言つた。

「さて、先程はオレのマスターがすまなかつた。それではオレの自己紹介からさせて貰う。オレの名はジークフリート。君が言つていた、竜殺しと言われている竜しか殺す事しか出来ないただの剣士だ」

「やっぱり貴方はあのジークフリートなんだよな?」

「ああ、そうだ」

彼はそう言つた。

そして彼は俺に質問をしてきた。

「君に少し聞きたいことがある。どうしてオレをジークフリートだとわかつた?」

「あんたは自分の名前を言つていない。だけど答えになるものはいくつもあつた」

「……………君に背中を見せたあの時か」

「最終的にあんたがジークフリートだとわかつたのは背中を見せた時。だけど他にも貴

方を確証する物があつた。それは貴方の剣だ」

「……まさか」

彼にも思い当たるところがあるようだ。

そして俺は言った。

「そう。ASTと戦つていた時にあんたはバルムンクと言つていた。そして不死身の肉体が武器をとおさない程に固いと考えれば納得がいく。背中を隠す事が出来ず、背中のある一部以外、不死身の体を持ち、バルムンクと呼ばれる剣を持つ。それがあんたがジークフリートだと証明出来る」

成る程。彼はそこまで予想して、いや裏で手引きしている組織がその予想を考えたという事か。

「有名過ぎるのも考えものだな」

オレはそう言つて士道を見て言った。

そして彼に伝えなければならぬ事を言った。

「君達は私のマスターである、プリンセスの力を封印するために此処にいることで間違いないのだな?」

オレの言葉に彼は、はいと返事をした。

「なら、伝えておく事がある。彼女は自分の力を封印することは望まないだろう」

「なっ!!」

オレの言った言葉に彼は驚いた。

そして彼はオレに言った。

「そんなこと、分からないだろ!!」

確かに彼は十香本人から、その事を聞いていない。当たり前前の反応だ。

だが、彼女の力を封印するという事は、オレの消滅、いわばオレ自身が死ぬという事である。

今の彼女はソレを決して望まない。

そんな事をしようならば彼女は彼の話も聞かずに殺しにかかるだろう。

現にそれが一度おきかけている。

故に、彼女の力を封印することが出来ないという訳だ。

その事をオレは彼に伝えた。

「確かに、そうだろう。だが、彼女はオレのマスターだ。彼女から精霊の力を封印してしまえば、オレはマスターからの魔力パスが無くなり消滅する」

その事を伝えると彼は驚いた用にして言った。

「消滅ってどういう事だよ? あんたは生きているんじゃないのか・・・?」

「正確にはオレは君達という幽霊的な存在だ。彼女を守るサーヴァントとしてオレはい

る。もし、君が彼女の力を封印するとしよう。そしてたらオレはマスターから貰っている魔力を供給出来なくなる。そしてオレは消滅するという訳だ」

それにと行ってオレは言葉を付け加える。

「彼女はオレが消滅すると知ったら間違いなく封印するのを拒否するだろう。下手をしたら君が殺されかねない。オレの消滅は彼女にとって生き地獄になるだろう。」

その最悪の結果だけは迎えたくない。君もそうだろうか？」

「つ……」

オレの言葉に彼は言葉を詰まらせた。

オレも彼の立場にあるのであればきつとやめるだろう。

しかし、彼女には一度聞いて見るのもいい。

「土道。一度オレからももう一度聞いてみる。また、オレ達が出現するときその答えを言おう」

オレの言葉に彼は分かったと言った。

そして、彼らが襲いかかってきた。

あの銀髪の少女が此方に突っ込んでくる。

だが、ソレを十香が剣を投げて進行ルートを妨害した。

そして十香が言った。

「……ジークと私の邪魔をするか!! 人間!!」

「……ッ!」

十香は怒り狂っている。彼らがオレの邪魔をした事に。そして自分自身に。

彼はもう退散したようだ。

ならこちらも後は退散するだけだ。

「マスター、退散だ!!」

オレの声を聞いて彼女は我に帰った。

そして此方に来て言った。

「すまぬ。あいつらに邪魔をされて、ジークの所にまで気づけなかった」

「大丈夫だ。もうすぐロストが始まる」

オレがそう言うと、マスターとオレはロストした。

ロストしたオレはマスターに聞きたい事を聞いた。

「十香、聞きたい事がある」

「何だ? ジーク?」

目を閉じてオレの膝に頭を置いている十香が言った。

「十香は、いつも襲ってくる彼等に襲われない、人間として生きるか、オレと一緒に彼等

と戦うかどつちがいい?」

「何かいい忘れてる事があるだろう?」

十香が言った。

「私が人間として生きる事になると、ジークはどうなるのだ?」

「ツ!!」

彼女の勘は鋭かった。

これは誤魔化せないと思いオレは言った。

「君が人間として生きるとオレはこの世にいなくなる」

その事を聞いて彼女の目に涙が浮かんだ。

そして彼女は言った。

「そんなのは嫌だ。私はジークと一緒にいたい。だからジークがいないのなら、人間として生きたくない。今のままでいい」

そう言うと彼女は泣き出した。

オレは何も言う事が出来なかった。

これから、彼女はどうぞすれば良いのだろうと考えながら。

街の散策および好敵手との出会い。

あれからオレは考えていた。

オレが消滅せず、十香が人間として生きられる解決策を。

何か大切な事を忘れている気がする。

その事を頭の中で考えながらオレは十香と共に引つ張られていった。

◇◇◇

その頃、土道は学校に来ていた。

だが、十香の現界のせいでも空間震がおき、学校の大半が瓦礫の山と化していた。

土道はその校舎を見ながらため息をつき独り言を言った。

「そりゃそうだよな・・・普通に考えてみれば学校が壊れた時点で休校だよな・・・」

自分の阿呆さ加減にもう一度ため息をついた。

あの後、反省会などをさせられ、寝不足で思考力が落ちているのかもしれない。

「はぁ・・・ちよつと夕食の買い物でもしていくか」

今日で三度目となるため息をこぼしながら、家の帰宅路とは違う道に歩き始めた。

確か卵が切れていたはずだし、夕食の材料もあまり無いので、何もせずこのまま帰っ

てしまうというのも何だった。

だが、数分と立たずに士道は足を再び止める事になった。

道の真ん中に立ち入り禁止の看板が立っていたからである。

「はあ……通行止めか……」

だがそんな物が無くとも、その道は通行出来ないことは容易に知れた。

何しろアスファルトで固められた地面は滅茶苦茶に掘り返され、雑居ビルは崩壊していた。

まるで戦争でもあったかのような有り様である。

「……そういえば、ここは」

この場所に覚えがある。始めてジークフリートと十香と呼ばれている精霊に会った場所である。

まだ、復旧の処理が終えていないのだろう。十日前の惨状を今だそのままに残していた。

「……………」

頭の中に少女と英雄の姿を思い浮かべながら、再びため息を吐く。

十香。

精霊と、災厄と呼ばれている少女。

あの少女は確かに、普通では考えられない力を持っている。

国の機関が危険視するのもうなずける。

今の俺の目の前に広がる惨状がその証拠だ。

確かに、こんな現象を野放しにはして置けないだろう。

「……い、……道」

ジークフリート。

彼は架空の英雄だ。

だが、そんな彼がサーヴァントとかいう幽霊として十香を守っている。

そんな彼は彼女以上に考えられない力を持っている。

「……ない、……道」

彼は一体何の為に彼女に呼ばれたのか？ 一体何が目的なのか分からない。

だが、俺達に危害を加えようとする人ではないと確信できる。

「……まない、土道」

……まあ、そんな事を頭の中でぐるぐると巡らせていたものだから、気づいて当然の事態に思考がいかに、校門まで歩く羽目になった訳であるのだが。

「考えている所すまない、土道。オレの存在に気づいてもらえないだろうか……すまない、空気が読めなくて本当にすまない……」

「……え？」

視界の奥、通行止めになっているエリアの向こう側からそんな声が響いてきて、土道は考えるのを止めた。

低い声でありながら、優しい声。

どこかで……具体的に昨日学校で聞いた事のある声。

今、こんな所では、聞こえてくる筈のない、声。

「え、えつと……」

俺は自分の記憶と今し方響いた声を照合しながら、その聞こえてきた方向に視線を向けた。

視線の先。

瓦礫の山の下に、明らかに街中に似つかわしくない鎧を纏った青年とドレスを纏った少女がいた。

青年に至ってはかなり、腰が低く謝っている用に見える。

「ジークフリートに十香!？」

そう、俺の目に以上がなければ、その青年と少女は間違いなく、昨日俺が学校で遭遇した精霊とサーヴァントだった。

「貴様が私の名前を言うな、ばーか」

彼女は自分の名前を言われてかなり機嫌が悪くなっている。

「すまない、士道。オレのマスターに悪気があるわけでもない。何時も通り彼女の事は名前で言っておいてあげて欲しい」

そして謝りながら、オレに言うジークフリート。

さつきから気になっていたのだが、謝ってばかりではないか？この英雄。

「ジークが言うのであれば私は構わん」

ジークフリートの言葉を聞いて名前で言っても良いと言った十香。

手のひら返しが早すぎる。

すると彼女は俺に近づいてくる。

と、通行の邪魔だったのだろう。十香は立ち入り禁止の看板を蹴り壊し、ジークフリートの手を組ながら俺の前に立った。

「な、何してんだ、二人とも……」

「……ぬ？何とは何だというのだ？」

「なんで、こんな所にいるんだよ……っ！」

士道は叫びながら後ろを見た。

立ち話をする人や、犬の散歩をする近所の主人が見られる。

誰もシエルターに避難していない。

つまり、空間震警報がなっていない。要するに、精霊現界の際の前震をラタトスクも、ASTも感知できていないということになる。

「それは、オレが答えよう」

さつきからずつと彼女の隣でいるジークフリートが言った。

「何故、オレ達が此処にいるのかと言う話だが、これは静粛現界と言う。いわば、空間震を起こさずに現界することが出来る方々だ」

ジークフリートは気になっていた事をすらすらと言う物だから俺の頭がついていけない。

つまり、空間震を起こさずに現界出来るということだろうか。

「まあ、今回はそのせいでオレ達が場違いだと思っただが、オレは霊体化した方がいいか？」

確かに街中で彼等の格好は目立ち過ぎる。

だが、肝心の事を聞いていない。なので一度場所を変える事にした。

「いや、一度此処から離れよう。聞きたい事があるからな」

「君の案に従おう。マスターはどうする？」

「ジークが言うのなら私はそれに従うまでだ」

そうして俺達は場所を変えた。

その時、ジークフリートは俺に彼女には聞こえない声で言った。

「これから、場所を移動するが君はマスターと一緒にデートに付き合ってくれ。オレは後ろからサポートする。マスターにも伝えておく」

自分が言おうとしていた事を的確にいうものだから、俺は彼を見た。

だが、彼は霊体化をしたのかそこには十香しかいなかった。

そして、彼女と俺のデートが始まった。

あの後、十香には着替えて貰った。あのドレスが一瞬にして来禅高校の制服になった物だから驚いた。

ジークフリートも着替えているのだが……いかんせん彼は目立ち過ぎた。

それは何故か？

背中を隠すことが出来ない呪いがあるせいで通常の服を着た瞬間、背中の部分だけが弾けとんだせいで背中が丸見えだ。

だが、それはまだいい。その解決策は彼の髪が長いからそうそう見える事はない。そしてこれが彼の問題点だ。

彼の腹から顎下にかけて何かの模様がある。

ソレを完全に隠すことが出来ない。

主に顎下の所が。

しかも身長が高くがっしりしている為に合う服が中々に見つからなかった。
そして今。

◇◇◇

成る程オレのマスターはかなりの大食いだったか。

オレは十香を見て思った。

きなこパンが面白いように無くなっていく。

これでは彼の財布が危ない。

オレは仕方ないと思い、あるスキルを使った。

そのスキルは黄金率。

いわば、金には困らないというスキルだ。

ただ、オレの戦闘で重要な幸運が下がるが。

少し稼ぐか、と思いつながらオレはパン屋を後にした。

その結果。

「稼ぎ過ぎてしまった・・・」

過程は省くが、オレは大量の金をももの数分で稼いでしまった。

黄金率はあまり使わない方がいい。

ただ、オレはそう思ったとだけ言っておく。

◇◇◇

ジークフリートが一度外に出たと思ったら、数分で戻ってきた。

大量の金を抱えて。

始めは何処からか盗ってきたのかと思つたのだが、引つたくりが先程あつたらしい。

そして、その引つたくりから鞆を取り返したらお礼だと言つて渡されたらしい。

何処のドラマやアニメだよと思つたぐらいだった。

まあそんなこんなで色々あつたが、これで金には困らなくなつた。

そして十香達をつれて次の場所に向かつた。

◇◇◇

気にくわない。

私が始めてこんな感情を知つた。

ジークは格好いいし、強くて優しい。

だが、彼の周りには沢山の女どもがいる。

ソレを彼は断っているが私はそれがどうしようもなく、気にくわなかつた。

何故、私を相手にしてくれない。

何故、他の相手にばかり優先して聞こうとする。

そう思うと無性に腹が立つた。

そして私はジークに言った。

「ジーク」

「何だ？ マスター？」

「私にも構ってくれ」

私が本音を言うのとジークは返答した。

「了解した、マスター」

そう言つて彼は私の隣に座り、一緒に話ながら食べた。

これ程の幸せな事は無いと思ひながら。

◇◇◇

オレ達はあの後、喫茶店に来た。来たのだが・・・名前がおかしい。

なぜならその喫茶店の名前は・・・

”喫茶マハーバーラタ”

何処のインド兄弟がいる？と思つたからである。

まあ、名前だけかもしれないとオレは考え、マスター達とその喫茶店に入つていった。

そして・・・

「いらつしやい・・・む？何故お前が此処にいる？黒のセイバー？」

「それはオレのセリフなのだが？赤のランサー？」

案の定いた。

何故、此処にいる。とういか何故喫茶店をやっている？

「話は後だ。セイバー。今は席に座るといい」

ランサーはそう言つて席まで案内をした。

そのやり取りを聞いた士道は気になったのか、オレに話かけてきた。

「ジークフリートさん。あの店長と知り合い何ですか？」

オレはその言葉に聖杯戦争の事を隠して言つた。

「ああ、彼とは敵同士としてルーマニアで戦つた。彼程の英雄はいないだろうと実感した位だ」

「そ、そんなにか・・・」

赤のランサー。および、カルナは強い。

あの黄金の鎧。あの技術。

彼はそれらを使いこなし、オレの鎧を貫ける事が出来る。

技術は彼方が上だが、耐久面に関してはお互いに同等だ。

故に、お互いに戦つたとしても決め手がない。

彼とはいずれ決着を着けたい物だと思つている。

そこまで、考えているとマスターが喫茶店に入つてから声を出していないのに気がつ

いた。

マスターを見ると肩を震わして顔をうつむかせている。

どうかしたのだろうかと思いいオレは声をかけた。

「どうした？マスター？何かあったか？」

すると十香が答えた。

「ジーク・・・アレは一体何だ・・・。あんなヤツとジークは戦っていたのか・・・？」

成る程。十香は野生の勘で彼がどれ程の強者なのか感じとつたらしい。

まあ、言いたいのは分かる。

彼は英霊の中でも最上級サーヴァントだ。

宝具のひとつひとつが核兵器に匹敵するほど強力なものばかり。

彼のあの宝具があれば国を滅ぼせるぐらいの事はやってのけるだろう。

十香はそんな相手に恐怖を覚えるに違いない。

するとランサーがこちらに来了。

「注文は決まったか？」

そう言うとランサーはオレを見た。

『近いうちに話し合おう』とだけ、見ただけで語り合った。

そして、俺達は注文して食事をした。

あの後は大変だった。

ラタトスクは介入して来る、マスターは勘違いをするとまあ中々に濃い一日となつた。

そして・・・

◇◇◇

今日は楽しかった。

ジークとシドーと一緒にデエトと言うのは楽しかった。

ジークと今度は二人きりで一緒にデエトをしたい。

それだけが胸の中に残った。

そしてシドーと言うあの男。

色々話してみたがジークの言った通り意外といいヤツだった。

友としてなら一緒にいけるだろうと私は思ったぐらいに。

この世界がこれ程美しいものだとは思わなかった。

これなら、ジークと一緒にこの世界で生きていけると思った。

だが、それも叶わないものだろう。

私は精霊だ。奴らからはこの世界にいてはいけない存在だといわれている。

だから、私はシドーのもとに行けない。

ずっとジークと一緒にいなければならぬ。

だが、シドーは大丈夫だと言った。自分は否定しなかった。

それなら私は……ジークと共にこの世界で生きていきたい。

一緒に笑って、一緒に生きていきたい。

だが、それも叶うことはない。

何故なら……シドーは死んだから。

◇◇◇

夕日が赤く空を染めている。

美しい夕焼けだった。

オレは土道とマスターの後ろを歩きながら考えていた。

あの時、ランサーは受肉していた。

受肉と知って思い出したことがある。

それは令呪による受肉だ。

確か、令呪を三画使うことによって出来るはずだ。

それならオレは彼女の力が封印されてもオレは現界できる、そう言おうとしたその時にオレは絶句した。何故ならオレがみた光景は、土道が十香を庇って死んだ姿だったからだ。

十香VS. ジークフリート&カルナ および封印

士道が死んだ時、オレは目を見開いた。

一体何処から狙撃をしたのか始めは分からなかったが、すぐに発見できた。

だが、十香は目の前で彼を殺された。

故に、止めようとしたがもう遅かった。

ジークが何か言っている。だが、私は耳を貸すわけにはいかなかった。何故なら我が友を殺したヤツが目の前にいるのだから。

「――〈神威霊装・十番〉……」

霊装。十香がもつ最強の領地。

顕現した瞬間、十香の周囲の景色が歪み、十香の体に絡み付いて霊装の形を取る。

そして光り輝く膜が内部やスカートを彩り――災厄は降臨した。

ギシギシと空が軋む音が聞こえる。

十香は視線を士道を殺した人物に向けた。

殺すに足りてしまった人間がいる。

十香は手を横に振り払うとそこから、巨大な剣が納められた玉座が現出する。そして納められた剣を引き抜いた。

そして、十香が剣を握る手に力を込めると、視線の先まで距離を殺した。

「な——ッ!？」

目の前に私が現れた事によって奴等は驚きの声をあげた。

目の前には驚愕に目を見開く女と、無味な表情の少女がいる。

憎い、その顔を見ると同時、十香は吠えた。

「〈塵殺公〉——〈最後の剣〉!!」

刹那、十香の足下にあった玉座に亀裂が走り、バラバラに砕け散った。

そして砕け散った玉座の破片が十香がもつ剣にまとわりつく。

そしてその姿を現した。

全長十メートルはあろうかという、長大過ぎる剣。

ソレを十香は軽々と振りかぶると、二人に向けて降り下ろした。

その一撃で太刀筋の延長線上である地面を這っていく。

そしてその一撃が大地を両断していた。

「この……ッ化け物め——!」

長身の女が叫び、武骨な剣で攻撃を仕掛けてくる。

だが、霊装を纏った彼女に通じるはずもなく、視線をそちらに向けただけで攻撃を霧散させた。

だが、十香はそんなものには興味を示さず、もう一人の方に目を向けた。

「貴様だな？」

十香が口を開く。

「私とジークの友を殺したのは貴様だな」

十香がそう言うと、少しだが、少女が始めて表情を歪めた。

しかし、彼女にとってそれはどうでも良かった。

〈最後の剣〉を顕現させた十香を止められるものなんて、この世に存在しないのだから。

怒りに狂った瞳で少女を見下ろしながら、冷静に、狂う。

「殺して壊して消し尽くす。そして死ぬ」

その瞬間、空から黄金の鎧を纏った男と竜殺しが彼女を止める為に降り立った。

◇◇◇

不味い事になった。

彼女は今、暴走している。

これはオレ一人で止めるのはかなり厳しいだろう。

最低でも、周りの被害は目をつむらなければならぬ。

そう思いながらオレは背中の剣を握ったその時。

「魔力がいきなり増幅したかと思いい様子を見てみれば……これは一体何事だ？」

そこには黄金の鎧を纏った赤のランサー、カルナがいた。

「ランサーか……話を聞いてくれないか？」

「このような非常時だ。話を聞こう」

彼はそう言つてオレを見た。

そしてオレはこの事態の出来事を全て語つた。

彼が生き返るといふことも。

話を聞き終えたランサーは言つた。

「成る程。では、先程の少年が来るまで俺達で時間を稼げば良いというわけだな？ それなら手を貸そう」

「助かるランサー」

オレはそう言つたと彼は言つた。

「いや、気にする事はない。俺とて彼女を救えるのなら手伝おう」

彼の言つた言葉に感謝しかない。

だが、今は時間がない。

「では、いくぞ!!ランサー!!」

「承知した、セイバー」

そう言つて俺達は彼女の元へ向かった。

◇◇◇

十香は目の前には現れた二人に怒りを向けていた。

何故、私の邪魔をする。

私はその感情を胸に秘めながらジークに言った。

「ジーク!!そこをどけ!!私はこの女を殺さなければ気がすまない!!」

「いや、退くわけにはいかない。オレはお前を止める。

どうしても殺したいのなら、オレ達を倒していけ」

ジークは私にそう言った。

「ならば、死なない程度にジークを痛めつけるだけだ!!」

私はそう言つてジークと剣をぶつけ合った。

◇◇◇

「幻想大剣 天魔失墜!!」

オレはそう言つて十香に剣を振るつた。

青色のビームが十香を襲うが、ソレを十香は巨大な剣で掻き消した。

その瞬間に、オレは彼女の腕を掴み押さえつけた所でランサーに言った。

「今だ!!ランサー!!」

「はああああッ!!」

オレがそう言うのと、ランサーはオレ達の上空に雷で出来た巨大な槍を作り出し、オレを巻き添えにする形でその槍を叩きつけた。

そして強烈な爆風と共にオレと十香はカルナの攻撃をともに食らった。

巨大なキノコ雲が立ち上る中で、オレはバルムンクを解放した。

「幻想大剣 天魔失墜!!」

十香はカルナの攻撃で額を切ったのか血が流れている。

そして、オレのバルムンクが十香に追撃がかかった。

「邪魔だ!!」

彼女はそう言うって剣を振るい、相殺した。

だが、その隙を見逃すカルナではない。

「武器など前座。真の英雄は眼で殺す!!」

キュインと音を出しながらカルナの眼から高出力のビームが十香に放たれた。

ギリギリ十香は首を傾けかわしたがその後ろにあつた丘が爆風と共に跡形もなく消し飛んだ。

その威力に十香は顔が恐怖の色を浮かべていた。

だが、カルナの追撃は続く。

今度は槍に魔力を溜めた。

そしてその宝具の名を言つて音速を越える速度で放つた。

「梵天よ、我を呪え!!」（ブラフマーストラ・クンダーラ!!）」

その瞬間、オレもろとも彼の宝具が直撃した。

その威力は核兵器に匹敵する程の威力を誇る。

だが、手加減をしたのだろう。周りへの被害は余りない。（山が消し飛んだが）

A S Tが退散していて良かったと思ひながら、オレはカルナの攻撃をくらう事になつた。

オレは大火傷だけですんだが、十香は違う。

霊装もボロボロ、肌には火傷の跡が痛々しく残っている。

この状態では彼女はもう戦えない。

オレはそう判断し、彼女に近づいた。

「十香」

オレの声に十香は顔をあげた。

瞳には涙を浮かべて、顔は煤で汚れていた。

そして十香は言った。

「ジーク・・・何故私はこんな目に合わなければならぬのだ？私は何か悪い事をしたのか？教えてくれ・・・ジーク・・・」

彼女は泣きながらオレに言った。

「悪い事はマスターはしていない。だが、マスターに人を殺す事はしてほしく無いだけだ。それに土道はまだ生きている」

「え？」

オレの言葉に十香は涙でぐしゃぐしゃになった顔をあげた。

そして空から声が聞こえた。

「十おおお香あああああ!!」

上空から彼の叫び声が聞こえてくる。

このままでと地面にダイブするだろう。

だが、それが起こる事はなかった。

何故ならカルナが空中で抱き抱えたからだ。

お姫さま抱っこという形で。

「ちよっ!!喫茶店の店長さん!!その格好は一体・・・というか下ろしてください!!」

「着地をするから口を閉じていた方がいい。舌を噛むぞ」

カルナはそう言って着地をした。

そして土道は十香に近づいた。

「シ——ドー……?」

まだ状況が理解できていない顔で十香は呟いた。

感動的な再会を潰すような真似をするように悪いと思うが、オレが消滅しなくても大丈夫な方法が見つかったと彼女達に伝えようとオレは言った。

「感動的な再会の所、すまないのだがオレが消滅しなくても良い方法が見つかった」

オレがそう言った瞬間、空気が固まった。

そして十香が身を乗り出して言った。

「本当か!?ジーク!?!」

「ああ、令呪を三画使つて受肉せよと言えば」

オレがそう言った瞬間、十香は言った。

「受肉せよ!ジーク!!」

「——」

速攻でマスターは令呪を使った。

何の躊躇いもなく。

「——」

オレは呆然とするしかなかった。そんなオレに十香は笑顔で抱きつき、ランサーと土

道は暖かい目でオレ達の様子を見ていた。

◇◇◇

あれから数日がたった。

あの後、十香の精霊の力は封印出来た。

ラタトスクにオレ達は回収された後色々話を聞かれた。

それにラタトスクの電子機器がランサーの宝具の余波によつて全てやられたらしい。

十香は今、士道と共に学校へ行っている。

何でも、ASTの折紙という、少女とケンカばかりしているらしい。

前に様子を見に行つて来たが大丈夫そうだった。

そしてオレはランサーとの決着を着けようと思つたのだが、士道の妹から精霊は複数いるという事を聞き、休戦状態になった。

そして受肉をしたオレは何をしているか？それは・・・。

「お待たせした。此方がイチゴのショートケーキにとチョコのムースだ。味わつて食べてくれ」

「セイバー。料理が出来た。二番席に持つて行つてくれ」

「分かった。では、持つていくとしよう」

今では喫茶店マハーバーラタの店員として働いている。

最近では女性客がとて多くなった。

おかげで十香の目が真っ黒になる時がある。

その度になだめているが、機嫌が悪くなるだけなので休みの日に一緒出かけるぐらいだ。

つと。お客がきたようだ。

「いらっしやいませ。何名様ですか」

「ジーク!!」

そのお客は十香だった。

オレを視界にいれた瞬間、飛び込んできた。

「マス、いや十香。今は仕事 중이다。後にしてくれ」

「むう。仕方ない」

彼女はオレの言葉を素直に聞いて席へ向かった。

今ではこのような日常が毎日続いている。

だが、まだまだ精霊はいるとなると、彼女達も救わなければならない。なら、オレはそれを手伝うだけだ。

すると、十香から呼び声が聞こえた。

「ジーク!!此方に来てくれ!!」

オレはその声にすぐに返答した。
「ああ、今はそちらにいく!!」

十香デッドエンド
終

四糸乃パペット

四糸乃と出会った日

カーテンに朝日が差し込む。

その光が顔に当たり、眩しくなり目が覚めた。

オレはベットから体を起こすと背を伸ばした。

背中の中の呪いのせいで、何時もの寝かたが出来ないせいだ。おかげで受肉してから、横になつて寝るか、うつ伏せになつて寝るかのどちらかしか出来ない。

不死身の肉体を手にしてから不便になつたと思つたものだ。

そろそろ朝御飯を作らなければ十香が学校へ行かなくなる。

そう思いながらオレはベットから降りようとしたが、オレの腰に誰かが捕まっている感覚があり、オレは布団をめぐつた。

そしてそこに居たのは……

「ん……」

オレの足を抱き枕がわりに十香が幸せそうな顔で眠っていた。

「はあ……」

またかとオレは思いながら溜め息をついた。

ここの所最近はこればかりである。

ラタトスクからは「十香の精神がオレといる間が一番安定するからマンションが出来るまで此処に住まわせる」と言っていた。

大体、此処はオレの家ではない。

ランサーの家の二階だ。

ランサーは身元がないオレ達に「此処に住むと良い」と言われた。

始めは断ろうとしたが、ラタトスクから「監視が面倒になるからマンションが出来るまでその家で住め」と威圧が伝わってきたので、ランサーにすまないと思いながら

十香と一緒に住むことになった。

そして今は男二人と美少女一人という空間になっている。

端から見たら大丈夫か？と思う絵面だが、大丈夫だ。

カルナはそんな事には興味がなく、オレは生前とはいえ妻がいる。

だが、その事を十香に知られたらどうなるのか、考えたくもない。

そんなこんなで今に至るといふ訳だ。

・・・話が逸れた。

まあ、十香がこのように毎晩、自分の部屋を抜け出してはオレの部屋に来て寝ている

ので、流石に頭が痛くなってくる。

そんな事を考えていると十香が目を擦りながら起きた。

「……………ん……………ジーク……………おは……………よう……………」

まだ、眠いのだろう。頭をこっくりこっくりとさせながら言っている。

そんな十香にオレは言った。

「十香。今から朝御飯を作ってくる。少し時間がかかるからもう少し寝ていると良い」

オレがそう言うと、眠気に勝てなかったのか、「ポスツ」と体をベットに倒させて、すうすうと寝息をたてながら寝てしまった。

やれやれと思いつながら、彼女に布団をかけてオレはキッチンに向かった。

階段を降りリビングに向かうと、そこにはコーヒを片手にニュースを見るランサーの姿があった。

「すまない、ランサー。少し遅れた」

オレは彼に謝罪をした。

なんせ、今日の料理当番はオレだ。

何時もより10分ばかり遅い。それはランサーもかなり迷惑だろうと思ったのだが、ランサーは気にしていない様子で言った。

「気にしなくてもいい、セイバー。今日は少しばかり早く起きたただけだ。お前が気にす

る事はない」

「では、早速朝食の準備に取りかかる」

オレはそう言つて朝食の準備に取りかかった。

それから三十分して十香が目を擦りながら降りてきた。

起きたばかりで、彼女の髪は寝癖が酷い。

これは直すのが大変そうだと思いつつ、オレは十香に言った。

「おはよう、十香。もう、朝食は出来ているぞ」

「ん……」

オレの言葉にコクリと頷きながら十香は椅子に座った。

オレとランサーはもう食事は済ませてあるので、後は十香だけだ。

モソモソと十香が食事をしている中、オレとランサーは天気予報を見ていた。

「今日も雨か」

ランサーの言葉にオレは言った。

「この所最近、雨ばかりだな。なかなか、洗濯物が乾かなくて困る」

かれこれ一週間も雨が降り続けているのだ。

そろそろ晴れて欲しいと思うところもある。

だが、天気は流石にオレ達でも替えることは出来ない。

そんな下らない事を考えていると十香が言った。

「ジーク!!今日は調理実習というものがあるから帰ってきたらクッキーと言うものを食べてほしい!!」

「分かった。楽しみにしているよ」

オレは彼女の言葉にそう返すと、彼女は嬉しそうにして着替えに行った。

そしてランサーが言った。

「それでは俺たちもそろそろ準備をしましょうセイバー」

「ああ、今日も雨だからそれなりには来るだろう」

「そうだいいが」

そんな事をオレ達は言いながら朝準備をした。

◇◇◇

しばらくして・・・

学校では死闘が行われていた。

士道はその様子を見て冷や汗を流していた。

何故なら十香と折紙が言い争いをしているからである。

事の発展は調理実習で作られたクッキーであった。

始めは十香がジークフリートに食べてほしいと言っていたクッキーを俺に味見をし

てほしいと言ってきたのでそれを了承し、食べようとしたら折紙のフォークによる投擲によるクツキー粉砕が言い争いの発展である。

「シドーには私のクツキイを食べてもらおうつもりだったのに邪魔をするな！」

「邪魔なのはあなた。すぐに立ち去るべき」

「何を言うか！あとから来ておいて偉そうに！」

これでは不毛な争いである。

それを止めるために俺は彼女達に言った。

「落ち着けて二人とも！」

放って置いたら殴り合いになりかねない。

俺は二人の間に割って入ると、なだめるように二人の距離を取らせた。

「ぬ…….それではシドーは、どちらのクツキイが食べたいのだ？」

「え？」

不意にそんな事をいわれ、俺は間の抜けた声を出した。

十香と折紙が、左右から同時に、クツキーが入った容器を差し出してくる。

「さあシドー！」

「……………」

十香と折紙、二人の刺すような眼光に射竦められた俺は、顔中にぶわつと脂汗が出る

のを感じつつ後ずさった。

「……どっちを食べても殺されそうな気がする。

そんな事を彼は考えながら彼は胃を痛めた。

◇◇

「……はあ——……」

学校が終わり、その帰り道に土道は溜め息をつきながら日の傾き始めた住宅街を歩いていた。

彼の顔は疲労の色に染まり、髪も心なしか艶がない。

それも無理はないだろう。

結局あの後、十香と折紙は喧嘩をし、そのたびに土道が止めにはいる。

そんなことが今日に始まったことではない。

先月から十香が転入してきてから、毎日のように二人の小競り合いが続いているのである。

それは彼も溜め息をつきたくなるのもわかる。

そして、もう一度溜め息を吐こうとし——

ポツンと突然、冷たいものが頭に当たった気がした。

「……うわ」

呻くようにして彼は顔をしかめた。

いつの間にか雨が降って来そうな天気になってきたのである。

「雨かよ。傘を持って来ておいてよかった」

「ん……?」

雨が降ろうとしているなか、彼はふと足を止めた。

「女の子……?」

目の前にいた少女に目が止まった。

可愛らしい意匠の施された外套を身に包んだ、小柄の影。

顔は窺い知れない。というのも、ウサギの耳のような飾りがついた大きなフードが彼

女の頭をすっぽりと覆い隠していたからだ。

そしてもつとも特徴的なのは、その左手。

やけにコミカルなウサギの人形がそこに装着されていたからである。

そんな少女が人気がなくなつた道路で楽しげに跳ね回っていた。

冷たい雨の中で、軽やかに踊る少女に、

目を釘つけにされ——

——ずるべつたあああああんツ!!

「は……?」

呆然と俺は目を見開く。

「……女の子が、コケた。」

それも顔面に盛大に。

彼女の左手からパペットがすっぽ抜け、前方に飛んでいった。

うつ伏せになつて動かなくなくなる。

「……お、おいッ！」

俺は慌てて駆け寄ると、その小さな体を抱えるように仰向けにしてやった。

「大丈夫か、おい」

そこで初めて少女の顔を見とることができた。

ふわふわの髪は海のような青。丸い頬。まるでフランス人形のように綺麗な少女

だった。

すると後ろから声がかけられた。

「すみません。この人形は彼女の物ですか」

後ろからかけられた声に俺はすぐに振り向いた。

そこにいたのは黒い肌に黒い髪 of 長身の男だった。

彼の色に反対するように白色の服が目立つ。

優男のような雰囲気 of 男だった。

すると俺に抱き抱えられていた少女は、俺が振り向いた時に目を覚ましたのかその男が持つていたパペットを奪い取るとすぐさま逃げていった。

「あ、おい」

少女が逃げていった方を俺は見ながら呆然とした。

すると褐色肌の男から声がかけられた。

「先程はすみませんでした。すこしばかりよろしいですか」

「あ、ああ・・・」

俺はその言葉に返事をした。

「私は人を探しているのですが、この写真に写っている男を見ませんでしたか？」

俺はその写真を見ると顔が固まった。

その写真の人物を見たことがある。

それは十香の力を封印する時と喫茶店でだ。

彼は目からビームを出して丘を消し飛ばす、傷はすぐに再生するといった精霊を圧倒

し、人外じみた強さを誇る喫茶店の店長だった。

そんな彼を探している男はいったい何者なんだ。

そんな事を考えながら俺はランサーと呼ばれている人物の所へ案内をした。

その頃、ジークフリート達。

「ん？」

「どうした？ランサー」

「・・・いや、何でもない」

そんなやり取りが行われていたそうなの。

ライダー

ジークフリート達はお昼過ぎのピークが終わり、落ち着いた中で休息をとっていた。休息とはいってもそう大した事ではない。

ただ、客がいない店の中でコーヒーを入れてそれを飲みながら雑談する程度だ。

その雑談の中でジークフリートは言った。

「ランサー。俺達が一度サーヴァントとして召喚されているとしたら他のクラスのサーヴァントも召喚されていると俺は予想をしているのだが、ランサーはどう思う？」

ジークフリートの言った事にカルナは答えた。

「間違いなく召喚されているだろう。だが、精霊という存在がこの世界にいる以上迂闊に手は出さないはずだ。」

だが、その逆もありえない事もない」

「精霊という存在に興味を持って襲う者もいる……か……」

ジークフリートの答えにカルナは頷いた。

「確かに精霊は強大な力を持つが、オレ達のように完璧に力を制御できている訳ではない。その力を使って悪くだみをする奴もいる筈だ」

「そう・・・だな・・・」

カルナの言葉にジークフリートは少し間を開けて言った。

「だが、十香をみる限りそういった存在の精霊はそういないだろう。だが、用心だけでは置いて損はない」

「十香のようにただ強力なだけの力を力任せにぶつけるだけでも宝具並みの威力はあるからな。シエルターがあるとはいえ、一般人が外にいたとするとかなりの死者がでるだろうな」

ジークフリートはそう言い終わった後コーヒーを少し口に含んだ。

そして時計を見ると3時30分の針をさしていた。

「もうそろそろ学校から土道達が始めてくる時間だな。そう言えば明日の仕入れはどうする？休日になるが」

オレがそう言うところカルナは言った。

「む・・・ならば仕入れを頼む。野菜や調味料がつかけていた筈だ。店番は俺がしておけ」

「野菜と調味料か。了解した。何が足りない？」

「キャベツ、ニンジン、トマト、胡椒に砂糖と言った所か」

カルナはそう言いながらメモを書き、それをオレに渡した。

「では、頼む」

「行つてくる」

そう言つてオレは仕入れに行つた。

喫茶店から商店街まではそう遠くない。歩いて10分といった所だ。

「キャベツは・・・ふむ・・・これか」

ランサーに渡されたメモを見ながら買い物をしていると

ふわつとした声がおレの名前を呼んだ。

「ジークフリートさん」

「む？」

オレの名前をフルネームで呼ぶのは土道と琴里そして後一人しかいない。

後ろを振り向くとそこにはピンク色の髪を肩まで揃え、学校の制服姿の少女がいた。

彼女の名前は園神凜緒。小さい時からの土道の幼馴染なんだそうだ。

どうやら夕食の買い物らしい。

オレは彼女に言つた。

「学校帰りか？凜緒。部活はどうした？」

オレの言葉に彼女は笑いながら言つた。

「今日の部活は休みなんです。また、土道の家に行つて晩御飯を作つてあげようかな」

て思つてきたら、ジークフリートさんを見かけたので」

「成る程。学校で十香はどうだ？ 迷惑はかけていないだろうか？」

「十香ちゃんは、いつも土道と一緒にいる事が多いかな。今日はジークフリートさんにクッキーを食べてもらうんだーって言つてたし。何時も元気ですよ」

「そうか・・・すまない」

「なんで謝るんですか？ 謝る事じゃないですよ」

「どうやら何時もの癖で謝つてしまつたらしい。」

「すまない・・・オレはこれを買つたら行くが、一度喫茶店によつて行くか？ 土道が一度店にくるらしいからな」

「ならお言葉に甘えようかな。私もすぐに行きますから先に行つてください」

「いや・・・入り口でまつておこう。学校での十香の事も聞きたいからな」

彼女は目を丸くしてすぐに苦笑すると少し待つてくださいと言つて歩いていった。

オレは買い物が終わつた後、近くの椅子に腰を下ろした。

そして空を見上げて、少しオレは自分の事を考えていた。

(もし・・・オレが本物のジークフリートだったのなら・・・一体どうやって彼女を助けられたのだろうか・・・)

ジークフリートの肉体に技量、オレは出来る限りジークフリートに近づこうと頑張つ

た。

彼らしく、自分を偽りながら振る舞った事もあった。

だが、どんなにジークフリートとして振る舞っても所詮は偽物。

本物と違い、オレは誇り高く生きていない。

時より思う事がある。

彼女に召喚されたのがオレではなく、本物の彼だったらと……。

そしたら、もつと良い結果になったのではないのかと。

そう考えると少し後ろめたくなる。

だが、彼女が召喚したのはオレだ。なら、自分が全力で十香を守らないといけない。

無論、士道達もだ。

らしくないなとオレは思いながら先ほど買ったたい焼きを口に入れようとすると、何

処からか“ぐう”と腹が鳴る音がした。

「ん？なんだ？」

隣から聞こえた腹の音にオレは眼をそちらに向けた。

そこにいたのはピンク色の髪を三つ編みにした一人の少女が……

「……………」

オレは夢を見ているのか？

「お腹すいたよお・・・」

そこにいたのはライダーだった。

だが、格好が可笑しい。いや、初めて会った時もおかしかったが今の格好は完全に女の子の格好だ。

だが、今の彼はオレに気づいていないのか机に片頬つけ、目を閉じた状態で此方に顔を向けていた。

どうやら腹をすかせているようなのでオレは手に持っていたたい焼きを彼に渡すべく、声をかけた。

「ライダー、これを食べろ」

「んー・・・だれえ？」

彼はそう言つて目を開けるとオレの顔を見た瞬間固まった。

そして・・・

「もしかしなくてもキミなのかい・・・セイバー？」

「久しぶりだなライダー。だが、腹が空いているのだろう？これを食べるといい」

「いいの!?!」

彼は相当腹が空いているらしく、食べていいと言っただけで目を輝かせていた。

「ああ、いいぞ」

オレの願いを出させてくれた恩人だ。

オレはすぐに了承した。

「いったただつきまーす!!」

ライダーはそう言いながらたい焼きにかぶりついた。

「んー!!おいひいー!!」

どうやら気に入ったようだ。



たい焼きを食べ終わったライダーは色々と話してくれた。

オレが死んだあの後、彼は世界を救ったそうだった。

(あのホームクルスの少年が世界を救った・・・か。オレは間違えていなかったのだな)

そうオレは思っていると、ライダーが言った。

「そういうえびさ、君って今何処に住んでるの?」

「ああ、近くの喫茶店だ。赤のランサーと今は一緒に住んでいる」

オレがそう答えると、ライダーは赤のランサーと一緒に!?!と驚いた様子で言っていた。

そしてライダーは少し考えるとんでもない発言をした。

「ねえ……セイバー良ければだけどき……一緒に住んでもいいかな？」

「何故？」

オレはライダーの質問を聞いた。

この辺りに住んでいるのなら、彼はアパートを借りていると思っていたのだが、次の発言を聞いて絶句した。

「その……追い出されちゃったんだよボク」

その事を聞いた時、オレはランサーにすぐに電話した。

あれから色々あり、カルナに空いている部屋はまだあると言って許しを得てもらった。

するとライダーは笑顔で言った。

「じゃあ今日からよろしく!!セイバー!!」

「ああ、よろしく頼む。ライダー」

「ふむ?何がよろしくなのだ?ジーク?」

後ろから十香の声が聞こえた。しかし、その声は恐ろしく冷たい声だった。

オレは後ろを振り向くと……苦笑いをしている凜緒と満面の笑み（なお目は笑っていない）を浮かべた十香がそこにいた。

それを見てオレは悟った。これは詰みだと。